



# 来訪者



stabucky

## 来訪者

---

随分、深く眠っていた気がする。

目を閉じたまま、眠りから覚めた。

覚めた理由を考え始めたところ、すぐにそれが分かった。

誰かが、我が家のドアを叩いていた。

家の者が出るだろう。そう考えて、もう少し寝ていることにした。

しかし、誰も出る気配がなく、来訪者はまたドアを叩いた。

家族は誰もいないのだろうか。みんな出かけたのかもしれない。

しかし。

そもそも今は何時なのか。昼寝をしていたと思っていたが、既に夜になっているのかもしれない。早朝なのかもしれない。

眼を開ければ、すぐに分かることなのだが、開ける気がしない。とにかく体の疲れが取れていない。もう少し寝かせてくれ。

そう思ったとき、またドアが叩かれた。

これほど執拗にドアを叩くということは、深夜ということはないだろう。

あるいは家の者が鍵を忘れたまま出かけてしまい、家に入れずに困っているのかもしれない。

それならば急いで起きて開けてやらねばならぬ。

ようやく起き上がる決心がついたが、いざ起きようとすると体が動かない。このような経験は初めてのことだった。これが金縛りというものか。

体を動かす以前に、目が開かない。

突然、恐怖に襲われ、声を上げようとしたが、口が開かない。

来訪者は本当に私の家族だろうか。

ならば、それは誰だろうか。

分からない。妻の名前を忘れてしまった。

顔も思い浮かんでこなかった。

では、子供の名前は何かであったか。それも忘れてしまった。顔も忘れた。

そもそも自分に子がいたのだろうか。分からない。

家族がいたかどうかすら忘れてしまった。

ならば私は誰なのか。

来訪者はドアを叩き続けていた。

やがて静かになった。

耳をすましてみた。

カチャという音が聞こえた。

来訪者がドアノブをひねったらしい。鍵はかかっていたいなかったのだ。

ドアをゆっくりと開ける音が聞こえた。

来訪者は、家族でなければ誰なのか。家族の名前も分からなくなってしまったのだから、来訪者

が誰であろうが構うことはないと思ったが、いざ来訪者が侵入してくるとなると身の危険を感じた。

空き巣だ。さもなければ強盗だ。

しかし、来訪者が玄関で靴を脱ぐ音が聞こえた。

空き巣がわざわざ靴を脱ぐだろうか。

そして来訪者が「いませんか」と声を出した。男の声であった。

何者か。

私は返事をしようとしたが、やはり声が出ない。目も開かない。

男の足音が廊下から聞こえる。家の中を探索しているようだ。

やがて、その足音は私の寝ている部屋の前まで来た。

ゆっくりとドアが開かれる。

そしてゆっくりと私の寝床に近付いた。

男が息をひそめて、寝ている私の顔を覗きこむ気配がする。

唾を飲み込む音がした。

衣擦れの音がした。男は手を伸ばしているらしい。

私の頬に触れた。

途端に、男は「わあ」と声を上げてその場にひっくり返ってしまった。

そして、こう言った。

「死んでいる」